

大竹市指定重要文化財

あそうづか あしろづか

史跡 浅生塚・芦路塚

浅生塚は、明和年間（一七六四～一七七二）に志太^{しだ}（浅生庵）

野坡^{やば}をしのんで建てられたものである。寛文二年（一六六二）、越前福井に生まれた野坡は、江戸に移り住み二十六歳の頃から俳諧の道を志し、のち芭蕉^{ばしょう}に師事した。晩年の薫風^{くんふう}「軽み」を主調とする「炭俵」（芭蕉七部集のひとつ）の撰に加わり蕉門十哲の一人として名を成した。

元文五年（一七四〇）、難波において七十九歳の生涯を閉じた野坡は、その半生を俳諧の旅に明け暮れ、主に西海路において多くの門人を育てた。西下の道すがら、大竹に滞在することも十数度に及び、その都度、俳諧興業を催して、俳諧の同好「竹里連中」の指導にあたった。

野坡三十回忌の年、芦路^{しょうもん}らを中心とした「竹里連中」により建立されたこの塚は、蕉門野坡流の俳諧が盛行した芸備地方において唯一のものである。

辞世の句

若水や ふゆはくすりに むすびしを

芦路塚は、孔雀坊芦路（一七〇一～一七七三）の没した安永二年の建立と伝えられている。

芦路は、厳島（宮島）の生まれで、大竹村庄屋の娘と結婚後に大竹に移り住み、当地で蕉門野坡流の俳風を伝えた。

辞世の句

あらうれし 舟が着いて候 岸の花

大竹市教育委員会